

団塊のカタログ

第12号

平成10年6月

トシタロー・グラフィティ



アトムとスフートニク

1957年（昭和32年）といえばワシは小学校4年生、その年の10月4日、ソ連は人工衛星**スフートニク1号**の打ち上げに成功した。

その後、犬や猿を乗せたり人間も乗ったり月へ行ったり遊泳したりと、中世の大航海並みの発展である。

スペース・シャトルに至っては文字通り行ったり来たり
の往復便で、日本人もドサクサに紛れて便乗している。

今ではその**シャトル**の打ち上げなどニュースにもならないし、ロシアの宇宙船**ミール**が長期にわたり地球を観測していることなど完璧に無視されている感がある。

湾岸戦争の実況生中継には確かに驚いたけれど、**オリン**

ピックを茶の間で見られることなんか当たり前だと思っているし、SFの「Fはフィクション（小説）のF」だったのがいつの間にかファクト（事実）のFになってしまった。

それもこれも**スフートニク1号**という、ツノを四本突き出した丸い鉄のかたまりから始まり、月だ宇宙遊泳だ通信衛星だとなったの

だから、そう考えると人類史上画期的なことなんだなぁとあらためて思うけれど、当時9才の俊太郎少年はそんなこととは違う次元で驚きかつ**ガッカリ**したものだだった。

☆

アーサー

スタンリー

原作A・C・クラーク、監督S・キューブリックのSF超大作映画といえば「2001年宇宙の旅」だが、その冒頭、^{ヨハン}J・シュトラウスの「美しく青きドナウ」をバックに巨大な**宇宙ステーション**が暗黒の宇宙にポッカー浮かんでいる、映画史上に残る有名な一シーンがある。

宇宙ステーションの化石見^{サン}本ともいふべきこの巨大なドーナッツ、この頃の「鉄腕アトム」に既に登場していた。

当時のワシといえば学校以外で情報を仕入れるにはマンガしかなかったから、そこで描かれているものはすべから

く現実だと思い込んでいて、ただそれが身近なところにはないだけで、アメリカとかソ連に行けば実際にあるものだとはばかりズーッと思い込んでいたのだ。

その「鉄腕アトム」の数多い傑作の中に、どんな題名だったか覚えてないが**黄色い馬**という名の麻薬が出てくる作品があった。

これが今と同じで子供の心と体を蝕む。

田鷺^{たわし}警部や中村警部が、定番の犬の形のバト・カーに乗ってアジトを探すのだが一向に見付からず、そこでアトムの出番となる。

麻薬中毒の少年になりすまし、アトムはついに製造工場を見付け出す。

地上をいくら探してもダメだったはずで、悪人たちの工場は**宇宙ステーション**の中にあったのだ。宇宙遊泳にも出てくるあの宇宙服だってすでにこの頃から手塚治虫の世界には存在していたのに、その少年の夢をロシア人がムザンに砕いてくれた。ガッカリした。

まだこの程度なのか、と。

アトムはマンガの中の話なのだというこはこうしてわかった。(ホントです、こんな少年は多い)

これから一步一步宇宙開発していくとなると、一体いつになったら**ステーション**が完成しアトムやウランちゃんが誕生するのか、そう考えるといやになってしまったのだ。

☆

宇宙遊泳・月面着陸すら過去のものとなってしまうし、ドーナツの形ではなくても宇宙基地らしきものも一応ある。

それもこれも、すべては**スフートニク1号**から始まったのだから、人類の夢実現の偉大な第一歩と言えるのだろうが、少年の夢をモロに打ち砕いてしまった罪は軽くない。

そうはいっても、その頃のショックからはなんとか立ち直れたから、ソ連をそろそろ許してやろうかと思う。バチが当たって解体してしまったし、あれから40年……時効だ。

校庭はワシらの飛行場

小学校5・6年生の頃(昭和33~34年)のホンの一時期、**紙ヒコーキ**がやたらワシらにウケたことがあった。

今でも細々と売られてはいるようだが、長

い木の角棒に竹ひごをくくりつけ、薄紙を張り、ゴム動力でプロペラを回すアレだ。**ワシモデル**が登場するまでの束の間のアダ花ではあったが、これはこれで結構楽しめた。

☆

ワシの母校湯島小学校の正門の前に^{がくせいどう}**学誠堂**とうえはらという、文具店と駄菓子屋とおもちゃ屋がいっしょになったセコい店が2軒ならんでいて、もともと**紙ヒコーキ**は売っていたのだがこれが突然大流行、男のコは争って作りあったものだ。

ソニー号・ユニオン号・キリン号などのブランドがあつたりして、商品名は**A級ライトフレーション**、製品仕様は全長423mm全幅395mm主翼面積336cm²翼面荷重5.95g/cm²などともっともらしく表示されていた。

A級といっても実は初心者向きで、なぜかB級の方が大きくて上級者向きなのだが、松が並で梅が上の鰻重と同じように、販売会社の気配りなのだろう。

その**A級**は50円位でB級は100円するかしないかだったが、B級はほとんど売れなかった。高いからと言う理由もそうだが、なにせ校庭が狭いものだから大型で良く飛ぶマシンは敬遠されてしまうのだ。

都心で電線のない広場という校庭くらいのもので、その狭い空間^{スペース}にワシらがドッと押し寄せるものだから空中衝突^{おそろでキス}なんかしょっちゅうで、そうなる悲哀の上なく、紙の翼はモロくも破れ、つないである竹ひごは外れてしまっ、見るも無残である。

☆

以前からあった**紙ヒコーキ**がこの時期に急にもてはやされたのも理由がある。製作上の難関の一つだった竹ひごの折り曲げが大きく改善されたのだ。それまではローソクでアブッて折り曲げていたから、ワシのような不器用者は火に近付け過ぎて燃やしてしまうか、

力を入れ過ぎてポキッと折ってしまう。

だから、ここいらが器用にできてスイスイと組み立てているヤツらを見ているとうらやしくてしょうがなかった。

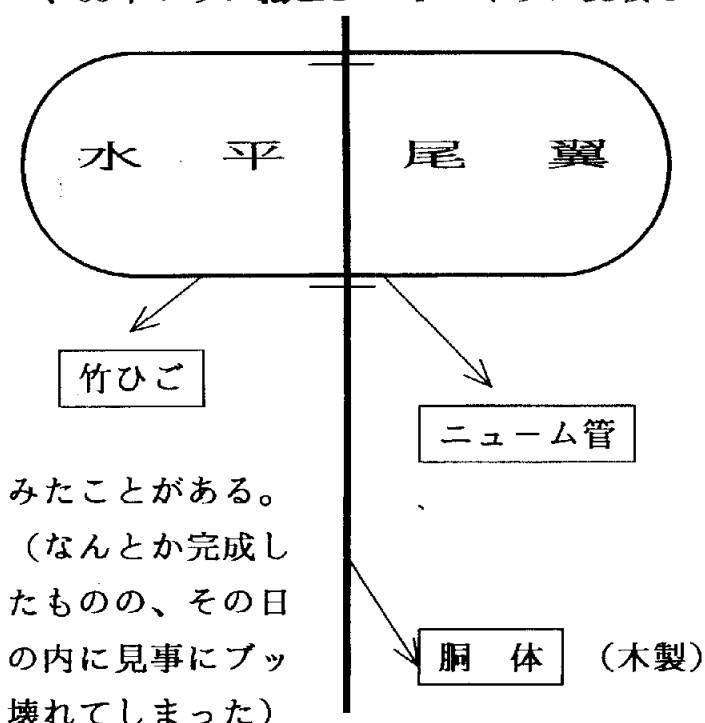
あせらないでジックリやれば良いのだが、生まれてからこの方、根気と努力にはエンがなく、たかだか**紙ヒコーキ**くらいで自分の生き方を曲げたくなかった。

要するに面倒くさいだけなのだが、そこへ突然、主翼・水平尾翼各2本、垂直尾翼1本の計5本の竹ひごがあらかじめ折り曲げた状態でセットされた製品が登場したのである。

他にも今まで木製だったプロペラや主翼台が軽くて丈夫なプラスチックになったりと、新素材の開発と品質改良にはめざましいものがあり、お陰で実に作りやすくなった。

先にあげた幾つかのブランドの一つ、ユニオン号は今でも販売されていて、何気なく入った町の模型屋さんにそれが置いてあった。

なつかしさも手伝って衝動的に買ってしまい、35年ぶりに**紙ヒコーキ**づくりに挑戦して



ワシの作り方はいつも決まっていて、水平尾翼から取りかかる。水平尾翼用の竹ひごは左右2本あるが、長さをそろえてから付属の

ニューム管で接続してから垂直尾翼を取り付けるのだが、ワシはこの段階で尾翼部分に薄紙を張ることにしていた。

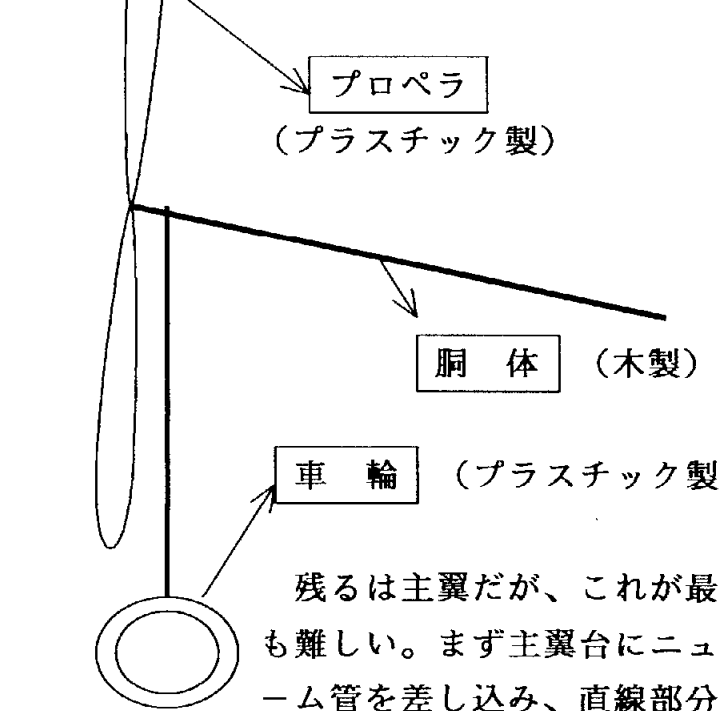
律義で真面目なヤツは竹ひごなど全部組み立ててからまとめて紙を貼る。その方が作業にムダがないからだが、ワシは主翼部分は最後にとっておく。

試験の時に易しい問題から取り掛かるのと同じで、このセコい性格は今も変わっていない。

まず糊と水を1対1の割合で溶き、筆で竹ひごにていねいに薄く塗る。プラモデルもそうだが、ヌリモノは控え目にした方が化粧同様に、仕上がりがスッキリする。

それから、竹ひご(=尾翼の骨格)のカーブに合わせて5~6ミリ外側をよく切れるハサミで丁寧に切り、これに糊をぬってから竹

ひごを包むように折り返して固定し、次に、胴体に脚とプロペラを取り付ける。



まず主翼台にニューム管を差し込み、直線部分の竹ひごをそのニューム管に通し、両端4ヵ所にまたニューム管を取り付け、今度は折り曲げてある竹ヒゴを差し込む。

これもまず長さが揃っていないから左翼と右翼を合わせ、同時にそのニューム管をちょ

っと上にそらすのだが、これを上反角^{しょうはんかく}といってこの調整次第で出来栄えが違ってくる。

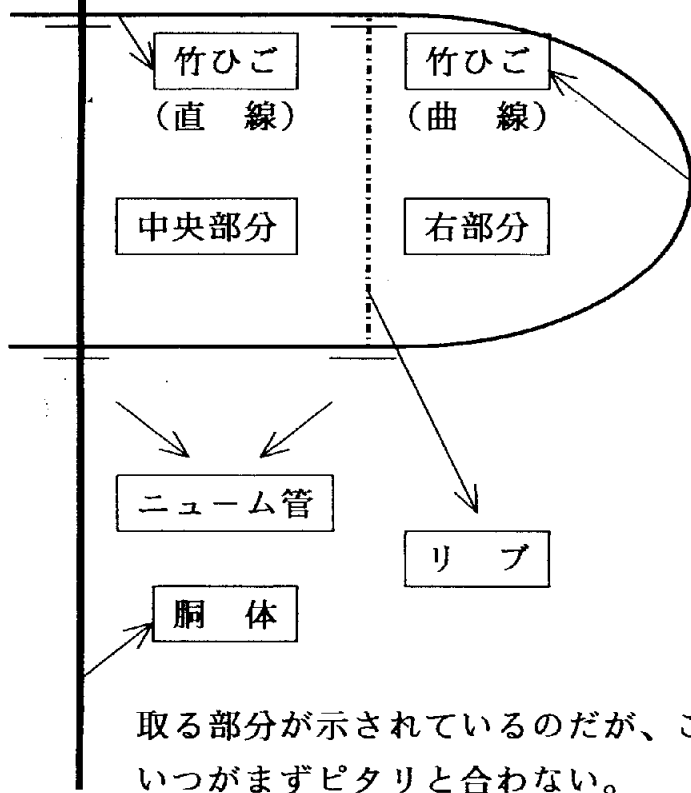
力を入れ過ぎると折れてしまうし、角度が悪いと良く飛ばない。次に、竹ヒゴと竹ヒゴの間をリブなるアルミの部品で固定する。

このリブは主翼にふくらみを持たせ、ここにプロペラからの風を受け、空を飛ぶという訳である。これで骨組みが完成し、最大の難関である主翼の紙貼りを残すのみだが、その前に胴体や主翼・尾翼の角度やバランスの最終点検をしておかなくてはならない。

主翼の紙は中央と左右に3分割されているから、まずは中央の部分から取り掛かる。

ここがうまく出来ないと左右両翼のバランスがとれないので慎重に取り掛かる。

この紙にヒコーキ名とか模様が印刷されていて、ご丁寧に点線で切り



せっかく苦勞して貼った主翼に点線が見えたりして、実にブザマなのだ。

最後に、ノリを充分乾かしてから霧吹きで吹いてピンと張らす。霧吹きがなければ自分の口でプハーッと吹き付けるわけだが、この時シブキにならないで、水のカタマリのまま

で飛び出すと悲惨で、せっかく苦勞して貼った紙が無残にもヤブけてしまう。

一夜あければ紙はピンと張るから、トドメに最終調整をしてやっと完成だ。

☆

授業が終わり教室の掃除が終わるが早いかうちに帰り、ランドセルをぶん投げトシタロー^{トシタロー}を片手に湯島小学校へと取って返す。

そこにはすでに何人かの同じような魂胆のガキ共が自作のヒコーキを飛ばしていて、狭い校庭はニアミスと本ミスの大連続である。

すれちがったり校舎の壁にぶついたり、ヒコーキ同士がキスしたりとそれはもう大騒ぎで、どんなに良く飛ぶヒコーキだってぶつかってしまえばそれっきりだ。

造る歓び、出来上がった歓び、飛ばす歓びの内、最後のヨロコビが一番短く、いったん破れてしまったツバサを再生する気にはなかなかない。中には器用に直してしまうヤツもいたが、ワシはだめだった。

竹ひごに残った糊を除去するのとその後のゴワゴワに紙を貼るのがしんどくて、小学生らしく爽やかに挫折することが多かった。

☆

そんな紙ヒコーキではあったが、やがてフラモテル^{フラモテル}に主役の座を譲る。国産ならマルサンの零戦^{ゼロ}、日模の武蔵^{ニチモ}、田宮の戦車、イマイの鉄人28号、舶来ではモノグラム^{スカーレーダー}のムスタング、リベルのダグラスAD6、レンウオーの人体模型などをセッセと作ったものだ。

☆

程度の差こそあれ、男の体内には大工ッ気^{だいくけ}とスケベッ気^けが同居していると言われる。

ワシら団塊の世代も天下御免の五十代、後者は多少軌道修正して一応存続しているが、前者が大昔に絶滅しているのは悲しい。

手を伸ばせば届くところにあるだけに、尚更そう感じる。ご同輩はいかが？